



東京都立大学

核医学物理学・保健物理学分野

担当教員 井上一雅
高畠 賢

研究内容

核医学や保健物理学（放射線防護）および放射線科学教育に関する研究を行っております。
主な研究は以下となります。

臨床および小動物PET・SPECT撮像技術に関する研究

- PET/CT画像の画質評価指標の精度向上に関する研究
- RI内用療法における放射線医薬品の集積部位の可視化・定量化に関する研究 など

環境放射線および放射線管理技術に関する研究

- 放射線被ばくに対する健康管理に資するアジア・アフリカ環境放射線研究ネットワーク
- AIを駆使した人工放射性核種の深度分布計測技術に関する研究
- α線放出核種の放射線安全管理技術に関する研究
- 福島原発事故関連の環境放射線・能の変化に関する調査研究 など

放射線被ばくによる生体影響に関する研究

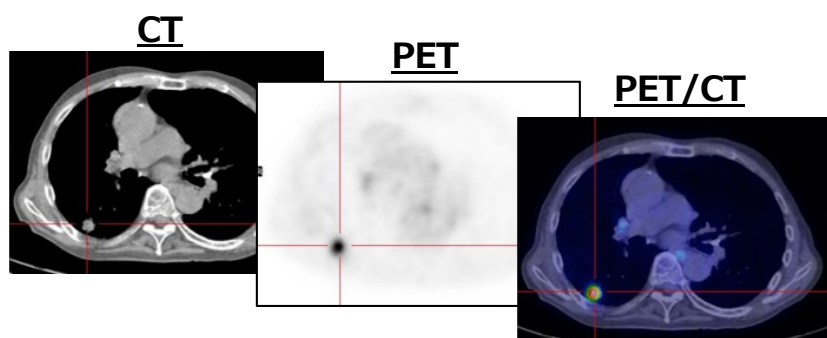
- ガンマ線および中性子線照射後のDNA損傷応答の年齢依存性
- 乳がんの分子生物学的メカニズムと線質依存性 など

水環境汚染に関する研究・その他の研究

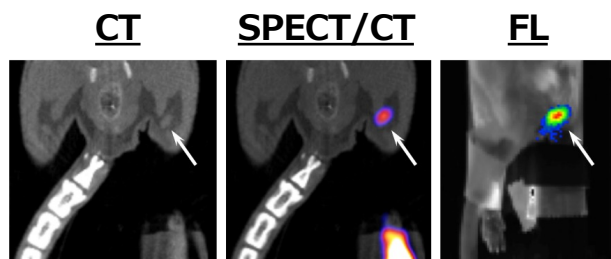
- 放射線グラフト重合技術を駆使した吸着技術の開発
- 医薬品に起因した水環境汚染に関する研究
- 放射線ファントム材料の品質検査技術に関する研究 など

主な共同研究先

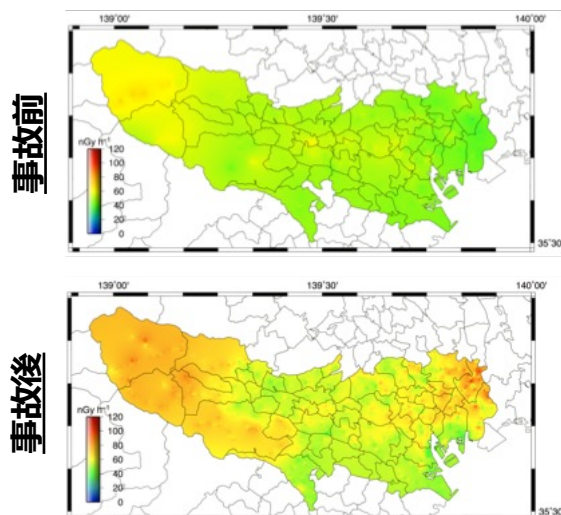
量子科学技術研究開発機構(稲毛・高崎)、東京都健康長寿医療センター、環境科学技術研究所、徳島大学、香川大学、弘前大学、国立がん研究センター、ハーバード大学(米国)、ジョージタウン大学(米国)、Peter MacCallumがんセンター(オーストラリア)、ポンディシュリー大学(インド)、H.N.B.ガーウォール大学(インド)、Guru Nanak Dev大学(インド)、Chitkara大学(インド)、CT大学(インド)、チュラロンコン大学(タイ)、チェンマイ大学(タイ)、ホーチミン市医科薬科大学(ベトナム)、国立チョウライ病院(ベトナム)、バーレーン大学(バーレーン) など



PET/CT検査における肺がん症例（呼吸同期有）



多機能分子プローブを投与したマウス膝下の
センチネルリンパ節イメージング



東京都内の福島原発事故前後の
環境放射線量の変化

本分野から現在までに博士27名、修士64名を輩出しており、臨床・研究・教育の分野で活躍しております（2023年度末時点）。研究意欲の高い研究生をお待ちしております。

NUCLEAR PHYSICS AND HEALTH PHYSICS

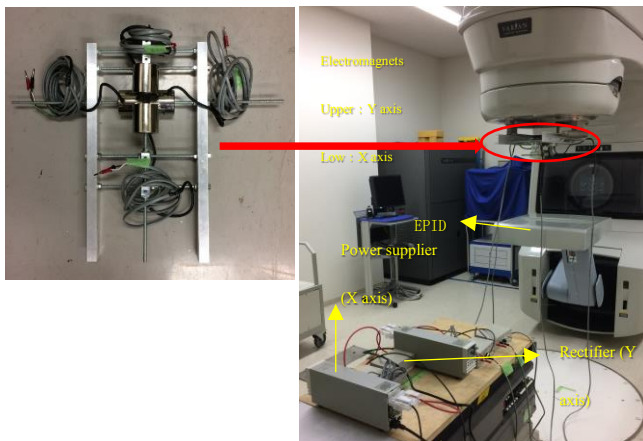
放射線治療物理学分野

担当教員 明上山 温

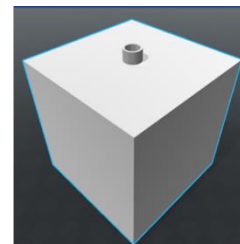
放射線治療に関係した研究として、高精度放射線治療のための新しい装置の開発、高エネルギーX線・電子線による高画質イメージング、安全な放射線治療のための自動患者認証など最新のテーマを、理学・工学的な知識とプログラミングにより実現する研究を行っています。

主な研究テーマ

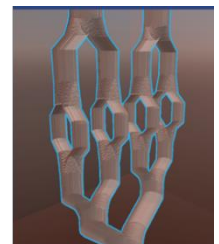
- ・ MV-CBCT の高画質画像再構成
- ・ 加速器による新しい画像の撮像法
- ・ 新しい血管走行ファントムの開発
- ・ GPU を用いた放射線物理シミュレーションの高速化
- ・ 体内線量分布計算のためのモンテカルロ計算の高速化



電磁石を用いた電子線の偏向による画像取得装置の開発
電子線の偏向によるバーチャルボーラスの開発



生成したファントムの3Dモデル



ファントム内部

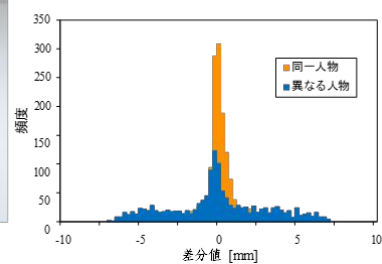
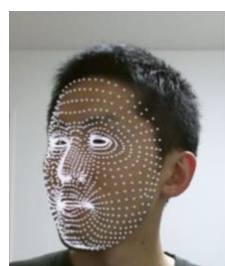
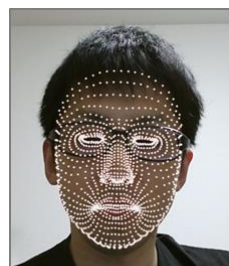
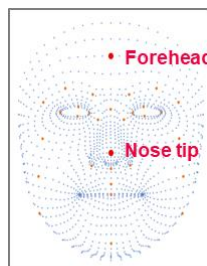


3Dプリンタ



造形後のファントム

新しい血管走行ファントムの開発



Kinect を用いた顔認証による患者認証の自動化



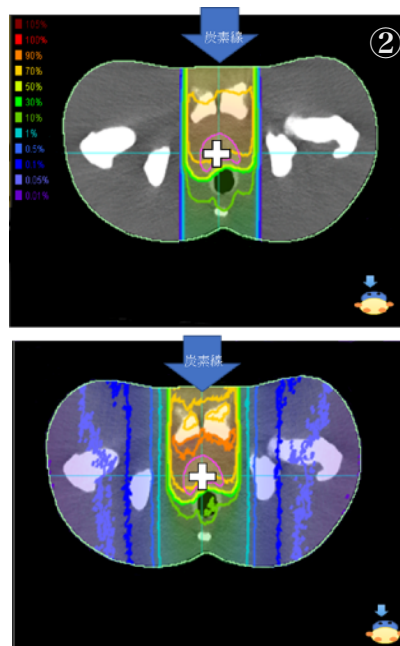
TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

東京都立大学

放射線治療物理学分野

担当教員 張維珊

当研究室は、放射線治療（光子・粒子線）における物理的基礎研究はもちろん、臨床研究にも携わっています。放射線治療の最新治療技術に関する線量計算・計測及び精度管理における課題について教育と研究を行っています。



研究室方針

自ら潜在問題を発見・解決する能力を育てること及び国際感覚を涵養できる環境作りを心掛けております。将来医学物理士を志す方は大歓迎です。

研究テーマ

- パッシブ型線量計による陽子線治療の第三者線量評価システムの開発
- 重粒子線治療の遡及的研究の線量解析ツール開発
- 炭素線治療の水吸収線量計測に関する基礎研究
- MR画像誘導放射線装置におけるビーム制御遅延時間の評価
- ポリマーゲル線量計を用いた中性子治療の線量計測に関する基礎研究
- NaIシンチレーション検出器によるリニアックのエネルギースペクトルの直接測定

図説

- ① 学内で利用できる医用電子直線加速器
- ② 治療計画装置(上)及びモンテカルロシミュレーション(下)で計算された線量分布の比較
- ③ ガラス線量計及び人体ファントムによる臓器線量計測

医用放射線計測学分野

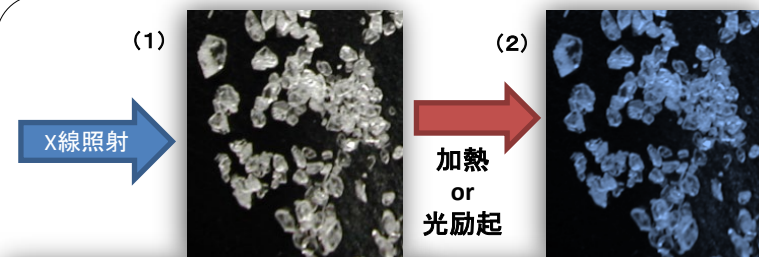
担当教員 眞正浄光

研究室の方針：自分で問題を解決できる力（自己解決能力）を育てることを大事にします。誰も答えを知らない問いに挑戦してみてください。放射線に感応する発光体の合成、化学分析、光測定、解析、計測システムの開発まで、当研究室で経験することができます。

研究内容：“熱蛍光”や“輝尽蛍光”という古典的な現象を利用して“時代のニーズにマッチした次世代放射線検出器の開発”と、そのメカニズムの解明に関する研究を行っています。

現在取り組んでいる主な研究課題

1. 陽子線、重粒子線用イメージングデバイスの開発に関する研究（共同研究先：放射線医学総合研究所）
2. 高精度放射線治療計画の検証システムの開発に関する研究
3. ホウ素中性子捕捉療法における中性子線と γ 線の弁別測定に関する研究
(共同研究先：近畿大学原子力研究所，京都大学複合原子力科学研究所，金沢工業大学)
4. ダイヤモンドを用いた放射線検出器の特性調査に関する研究
(Orbray株式会社、東北大学，金沢工業大学)
5. 水晶体の被ばく線量や、平均乳腺線量用の放射線検出器の開発に関する研究



○熱蛍光と輝尽蛍光

X線などの放射線を照射した結晶（１）に、熱や光を加えると発光がみられることがあります（２）。熱を加えた時に生じる発光は“熱蛍光”と呼ばれ、光を加えた時に生じる発光は“輝尽蛍光”と呼ばれています。いずれも、照射した放射線の量に相関した光を放ちます。その特性を利用して個人被曝線量計等に利用されています。

○２次元化

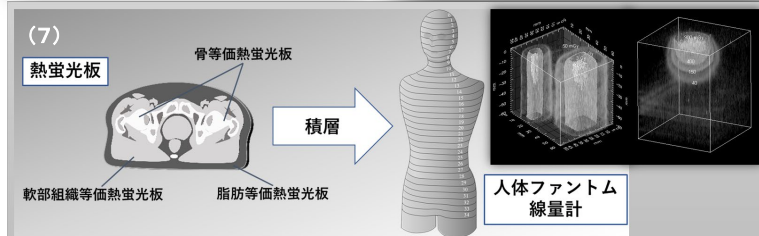
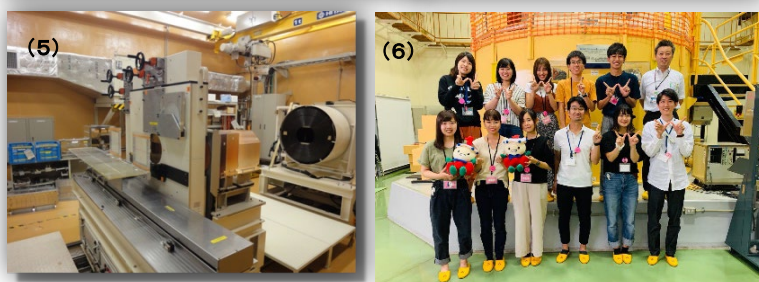
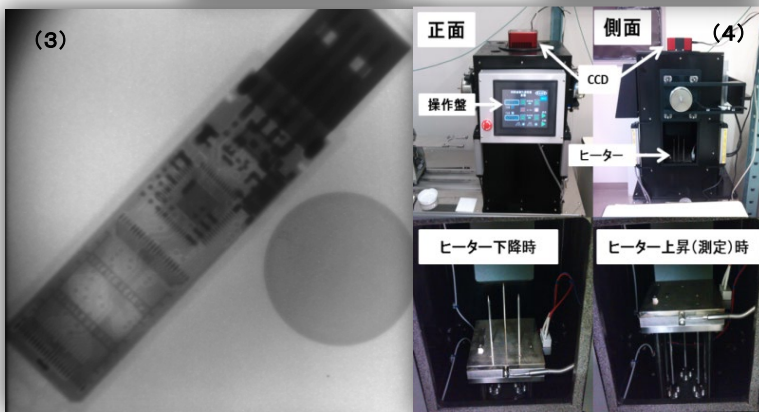
“熱蛍光”や“輝尽蛍光”を示す結晶を２次元に分布させると放射線イメージングデバイスとして利用できます。写真（３）は、当研究室で開発した熱蛍光板状線量計によるUSBと１円玉のX線写真で、（４）は測定器です。（特許出願 10件以上）

とても分解能の高い画像が取得できます。これは、高精度放射線治療計画の検証や、陽子線治療、重粒子線治療、ホウ素中性子捕捉療法、などに関するイメージングデバイスとして利用できます。既存の線量計と異なる情報を取得できる新しい線量計として期待されており、新聞や雑誌にも紹介されています。

○医療に求められる放射線検出器の開発

放射線医学総合研究所の重粒子線がん治療装置（５）や近畿大学原子炉（６）、京都大学原子炉を利用する研究では、放射線の線質を弁別する測定法や、線量分布測定法を開発することに取り組んでいます。

それらの開発には、“熱蛍光”や“輝尽蛍光”を精密に測定することやメカニズムを解明することが重要になります。科学的根拠に基づいて、医療現場に求められる最先端の放射線検出器の開発を行っています。放射線治療計画を検証するための人体ファントム型線量計はその一例です。（７）



医用放射線計測学分野

担当教員：松本真之介

○研究室概要

放射線治療/診断その他全ての放射線からの被ばく線量や健康影響を実測、数値シミュレーション等の様々なアプローチで評価します。医学物理学、放射線防護学の観点から研究を行なっています。

※キーワード

重粒子線(炭素, 陽子)治療, X線治療, Computed Tomography, 線量評価, 放射線防護, 発がんリスク評価, 放射線検出器開発, モンテカルロ計算

○主な研究課題

- ①超小型球形線量計を用いた放射線治療中の臓器内線量評価
(共同研究機関:量子科学研究開発機構)
- ②実測/計算に基づいた粒子線治療で発生する2次線量評価
(共同研究機関:量子科学研究開発機構)
- ③粒子ビームの y 分布測定に用いるダ イアモンド 検出機の開発
(共同研究機関:量子科学研究開発機構, 群馬大学)
- ④モンテカルロ計算を用いた放射線治療後の2次発がんリスク予測
(共同研究機関:量子科学研究開発機構, 日本原子力開発機構)

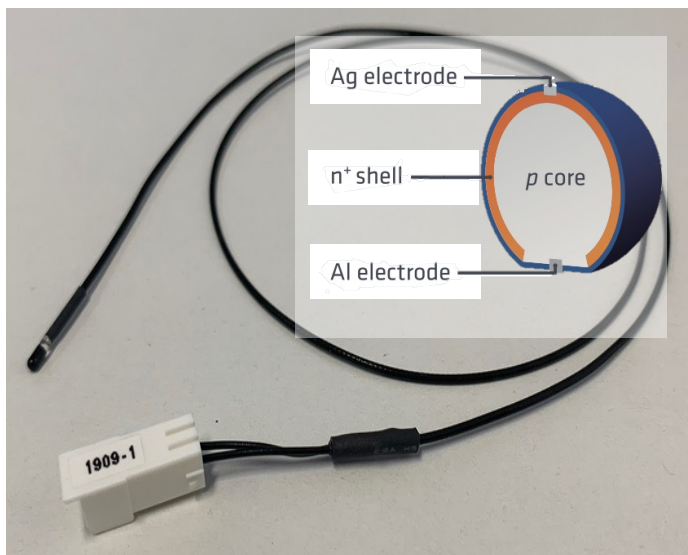


図1 超小型球形線量計の外観

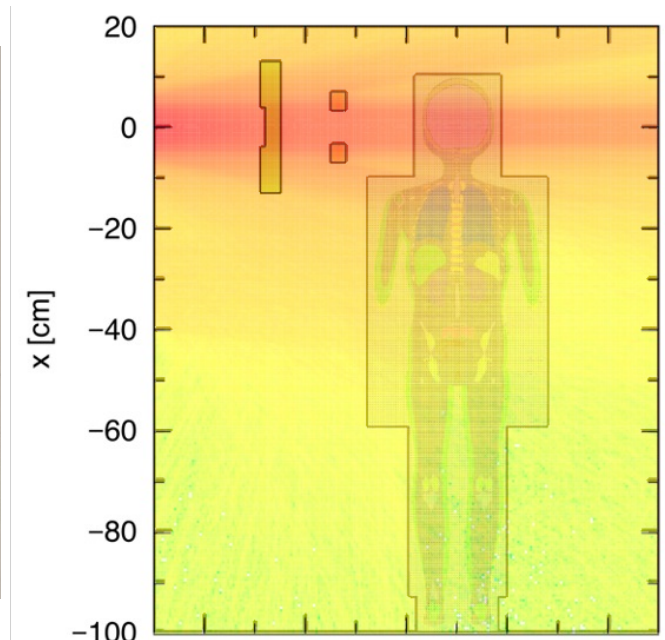


図2 モンテカルロ計算を用いた粒子線治療中の2次線量評価

計測学を軸として、臨床研究や放射線防護研究を実施できる環境を整えます。研究職/技術職として活躍する為の素養を、楽しく自然に身につけられるような研究室を運営できるように努めます。いつでもお問合せをお待ちしています。

【連絡先】 Email : matsumoto.shinnosuke@tmu.ac.jp, Room: 515

医用画像診断学分野

古川颯、白川崇子

我々の研究室では、CT (computed tomography), MRI (magnetic resonance imaging), US (ultrasound) を中心とした画像診断および、Interventional Radiology に関する臨床研究を主に行います。第1に、救急疾患の早期発見や適切な治療選択につながる画像診断の発展を目標に、さまざまな疾患患者の画像を収集、解析し、検査法の特徴と限界を明らかにし、より精度の高い検査、診断法の開発をめざします。第2に、消化管の蠕動運動や臓器の形態に関する形態機能画像とその評価法を開発します。第3に、最新の超音波技術を用いて、表在臓器（皮膚・皮下、軟部組織、甲状腺、乳腺）に関する診断法を開発します。下段には、画像の進歩により診断が可能になったさまざまな臨床例を供覧します。

主な研究課題

- # 消化管出血に関する MDCT の診断能と適応
- # 腸管虚血に関する MDCT の診断能
- # さまざまな急性腹症、消化管疾患に関する研究
- # MRI を用いた消化管蠕動運動の機能解析
- # 肝硬変患者の肝形態変化の画像解析
- # 表在臓器に関する超音波診断

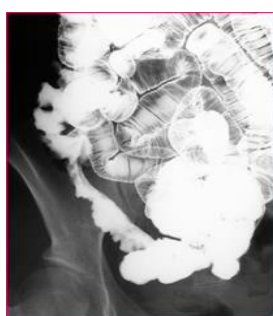


A : 造影 CT coronal image

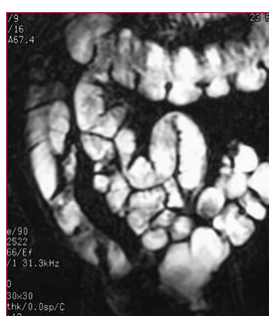


B : Angiography

図1：上行結腸憩室出血症例



A : Barium study



B : MRI (SSFSE with fat saturation)



C : MRI (SSFSE)

図2：Crohn disease

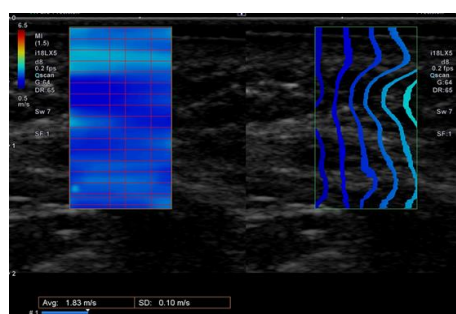


図3：頬筋の超音波エラストグラフィ

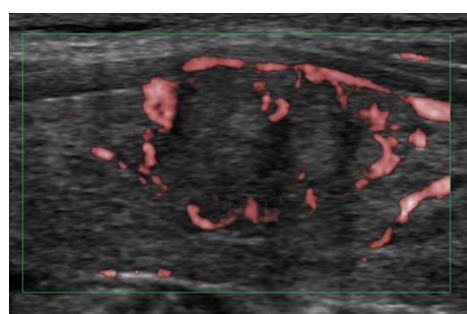


図4：甲状腺腫瘍の超音波パワードプラ

1. 研究 病気や障害で苦しんでいる患者様や障害者およびその家族をはじめ、臨床現場で働く医療技術者に役立つ研究をテーマとして研究を進めていきます。

1. MRIによる脳機能解析（機能的MRI&拡散テンソル解析）

MR装置を利用して脳の賦活部位を同定したり、脳神経線維の走行異常を検出したりすることで、脳疾患の回復過程を明らかにしたり新しい診断法を開発します。また、解析のための新しい画像処理法やMR撮像法（fMRIやDiffusion）のプログラミングもおこなっています。

2. MRIの新しい撮像法の開発

本研究室では、さまざまな新しい臨床用MR装置の撮像シーケンスや画像再構成法の開発をおこなっています。撮像シーケンスのプログラミングはPhilips社のGOALC、画像再構成法の開発はC言語またはITT社のIDLやMathworks社のMATLABという言語を使用しています。

3. 動画像処理によるコンピュータ診断支援（Computer Assisted Diagnosis; CAD）

画像中の物体を追跡する動画像処理法を医学に応用し、胃のX線透視像による消化器診断や心筋ゲートSPECT検査画像から3次元心筋動態解析などコンピュータ診断法を開発しています。

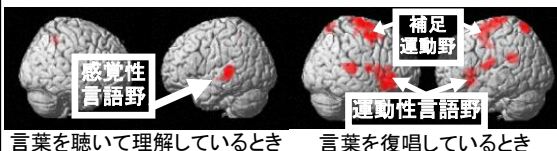
4. 危機管理およびペーシェントケア

医療スタッフが現場で一番多く失敗することは何か？また、患者に対する接遇法などについて意識調査をおこなっています。

機能的MRI

言語機能は左脳だけを使うというのは本当か？

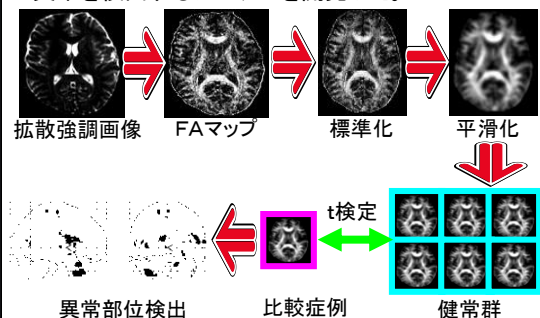
言葉の復唱は①言葉を聴いて理解する（感覚性言語）②言葉を声にして復唱（運動性言語）として左脳が関与しているということは約100年前から言われていましたが、それを可視化することができませんでした。昨年、これらの状態を世界に先駆けて可視化に成功し、言葉の発語に左脳だけでなく右脳も関与していることを明らかにしました。この研究は言語障害が回復過程を明らかにし、言語治療の効果判定に役立ちます。



拡散テンソル解析

画像診断で精神病を診断できるか？

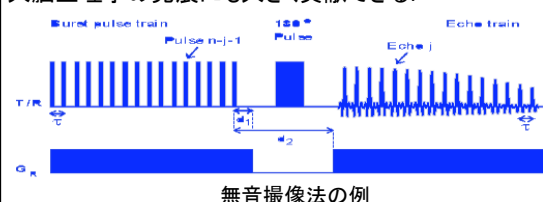
強迫性障害や統合失調症（精神分裂病）はシナプスの配列が普通と違うと言われてる。そこで、神経配列の異常を検出するシステムを開発した。



MRIの新しい撮像法の開発

全く騒音のしないMR撮像法の開発

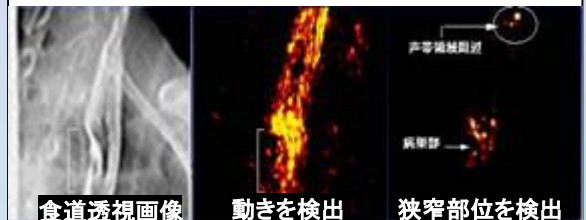
MR装置は放射線を使わずに人体の断層像が得られるという特徴があるが、撮像時に大きな騒音が発生する。本研究の実用化により、MR検査室にBGMなどを流しながら検査が可能となるなど、検査室環境を大きく変革させることができるとされる。さらに、脳機能撮影においては音声や音などの刺激の解析が可能となり、大脳生理学の発展にも大きく貢献できる。



動画像処理によるCAD

熟練医師の消化器診断法をPCで再現

X線透視検査は医師により診断されているが、診断する医師の熟練度で病気の診断精度が大きく異なるといわれている。本研究は、熟練医師による診断をコンピュータで再現することを目的とした診断支援システムを開発する。これまでの成果では、動画像処理により、狭窄部位を特定することが可能となった。



2. 教育

研究室で独自に作成した言語習得カリキュラムを受講することで、医用画像処理やMR撮像シーケンスについて理解を深め、誰でもプログラミングができるようになります。病院や研究所および企業の中核として活躍できる人材の育成に努めます。

画像診断システム学分野

根岸 徹

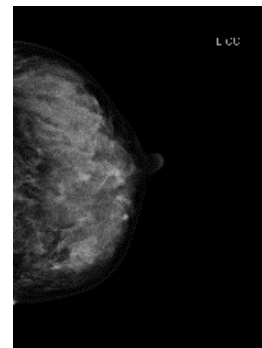
研究について

主として画像診断機器システムの画質向上，および医療被ばくの最適化について検討を行うため，各医用画像機器の測定，解析を行う。

✓ 乳がん画像に関する研究

現在，乳がん検診に推奨されている検査方法は**マンモグラフィ**であり，画像の乳腺濃度は，がん発見に影響を及ぼす．特に高濃度乳房は発がんリスクの高い所見の一つとされている．そこで，画質と被ばくの両面から装置の特性解析を行い，乳房用X線装置の最適化を検討する．

PMMA(mm)		
Breast Thickness(mm)	1	40
Air Karma(mGy)	7.667	
Breast Thickness(mm)	40	
HVL(mmAl)	0.338	
Spectrum	Mo/Mo	
Breast Glandularity(%)	50	
Average Glandular Dose(mGy)	1.747	



✓ 医療被ばくの最適化に関する研究

2015年に我が国の医療被ばくにおける**診断参考レベル**が策定された．そこで，医療現場における画質と被ばく線量の最適化について検討する．

✓ 診断用放射線機器の精度管理に関する研究

近年ではIEC規格として画像診断機器の日常試験方法として，**受入試験**，**不変性試験**等の品質保証に関して審議，発行が進んでおり，随時JIS化されている．これらの規格を基に診断用X線装置の精度管理について検討する．



教育について

X線診断機器学を中心として，医用画像診断装置の最近の動向や安全，および品質保証について最新のIECや論文など取り込んだ教育を行うとともに，X線測定技術の習得方法などを実践的に行う．

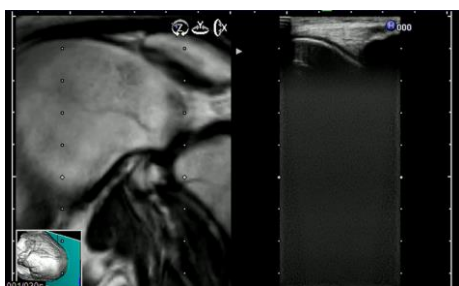
医用画像解析や教育工学に取り組んでいます。

1. 超音波画像の画質評価

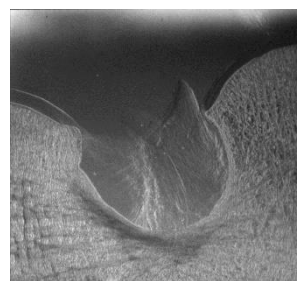
- 乳がん自動検診システム開発。
- 変形性膝関節症予備群を対象とした検診システム開発。

2. 医学応用のための放射光イメージング

- 屈折コントラスト法におけるトモシンセシス画像再構成の開発。



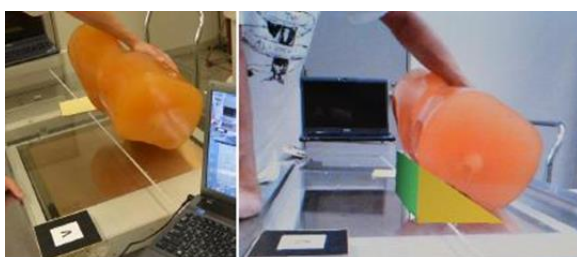
MRIと超音波画像の同時表示



単色X線による靱帯と軟骨描写

3. 放射線技術学教育支援システムの開発

- 拡張現実 (AR) 技術にポジショニング支援の研究と応用。
- OCTデータを用いたX線撮影画像の教育用シミュレーション。



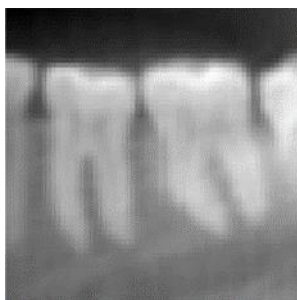
リアル映像と拡張現実による仮想角度計



体位情報に合った撮影シミュレーション



3D-CG表示例



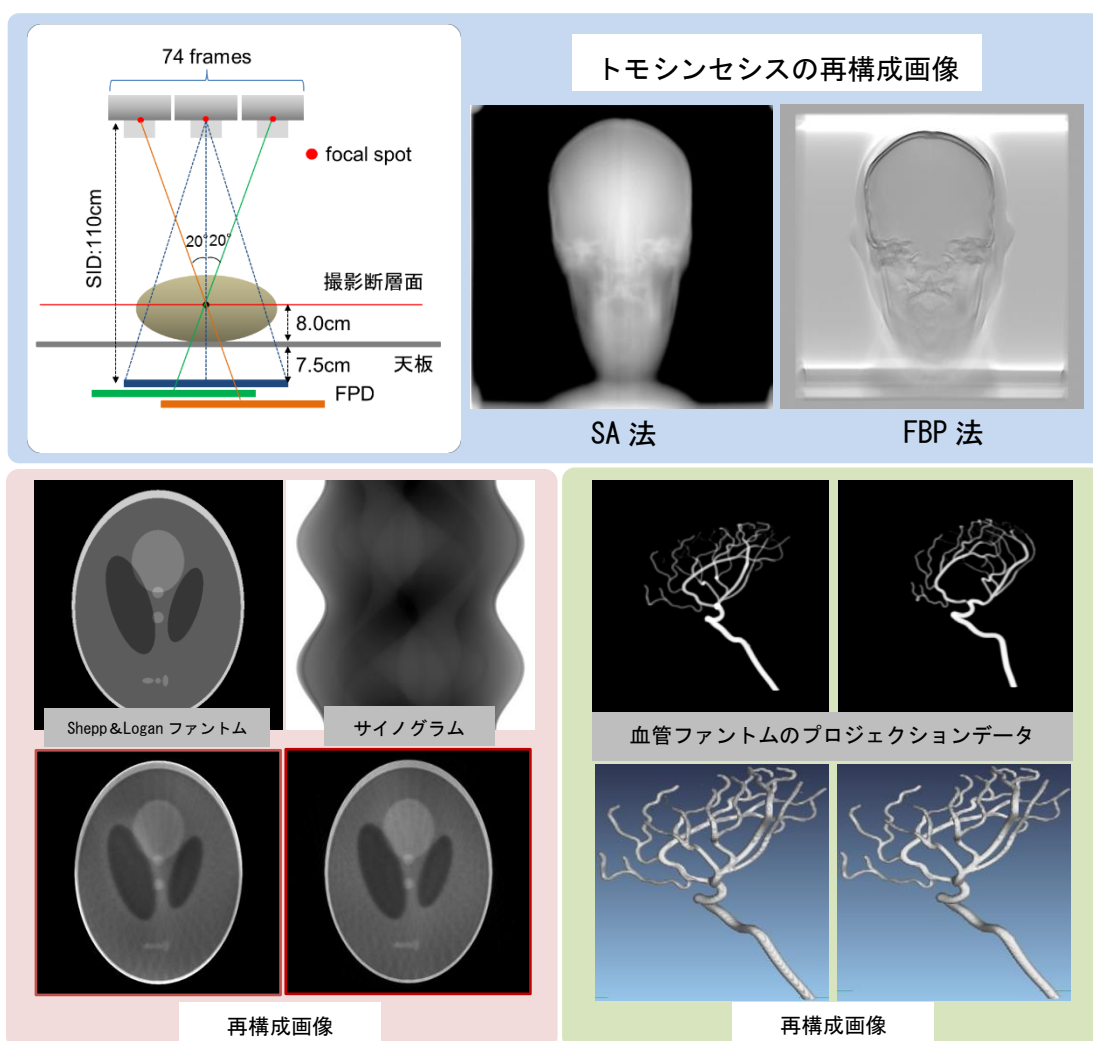
歯科X線シミュレーション

医用画像情報学分野

乳井嘉之

1. 『研究』

解析的および統計的画像再構成法を用いて、医用画像のイメージングに関する基礎的研究を行っています。主にトモシンセシスの画像再構成に関する研究、逐次近似的画像再構成法を用いた少数方向から得られる X 線画像からの画像再構成に関する研究を行っています。



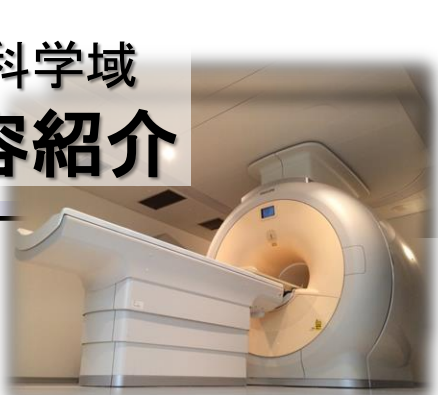
2. 『教育』

医用画像情報学特論では画像再構成法の基本原理について講義し、医用画像情報学特論演習では、実際に簡単な画像再構成プログラムを作成して、各種パラメータ（投影方向数、繰り返し計算回数等）を変化させて画像再構成の理解を深めてもらいます。



東京都立大学

人間健康科学研究科 放射線科学域 沼野研究室の研究内容紹介



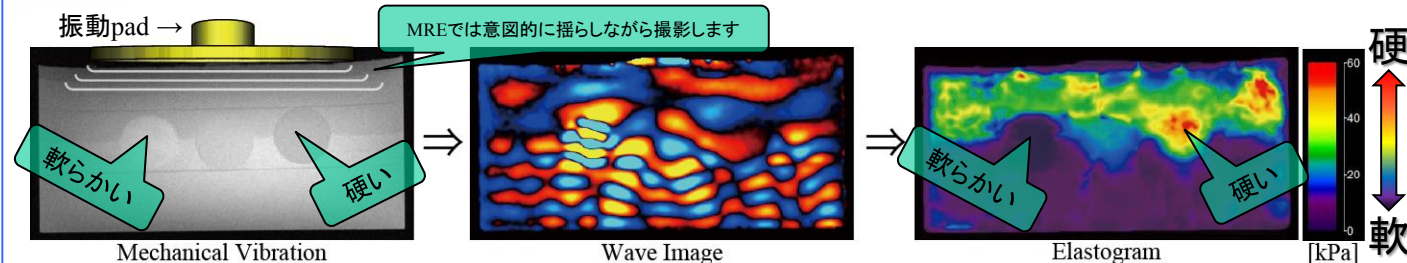
沼野研究室の研究テーマ... **MRI**

これまで画像化が難しかった生体内の情報を
MRIによって可視化する技術进行研究しています。

”硬さ”を画像化する技術:Elastography

A Simple Method for MR Elastography: A Gradient-Echo Type Multi-Echo Sequence.
Magn. Reson. Imaging 2015 33:31-7

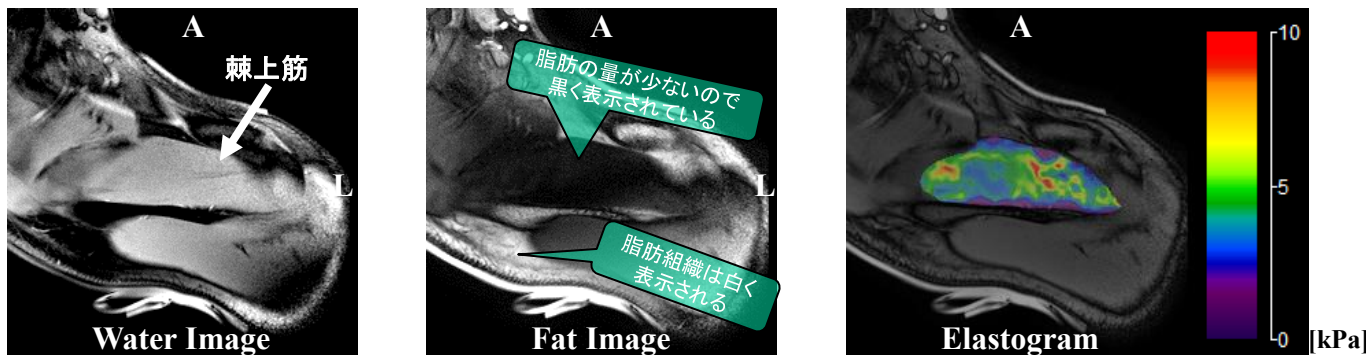
MRI製造メーカーの技術に頼らないMR Elastography(MRE)を提唱し、独自技術によるMREを実証しました。MREはこれまでのMRI技術で画像化できなかった、生体内の”硬さ”を画像化することができます。これにより、これまで画像化が不可能だった”硬さの分布”を反映した画像情報を得ることが可能です。



新しいMRE撮像法の開発

首都大学東京健康福祉学部研究安全倫理委員会(受理番号10085,13001)
Simultaneous Acquisition of MR Elastography and Two-point Dixon Imaging. ECR 2018: ESR/EFRR Radiographer Awards
特許 第6548257号

組織内の水・脂肪・硬さの画像を同時に得ることができる新しいMRE撮像法を開発しました。

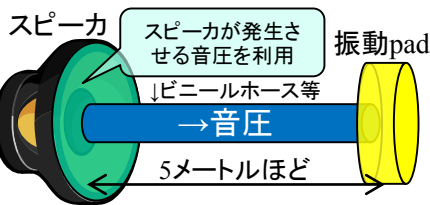


体内には多量の脂肪組織が存在しており、脂肪組織からの信号がMRI画像に影響を及ぼして、画質を低下させる場合がしばしばみられます。また、組織が含有する脂肪の有無を知ることで、より正確な診断情報が得られる場合もあります。よって、多くのMRI撮像において、水・脂肪の分離画像化(もしくは脂肪抑制画像法)の付帯が一般的です。新しく開発したMRE撮像法は、これまで測定が困難であった身体の深い部分にある組織(例えば棘上筋など)の硬さと、組織の内の脂肪の有無を同時に測定・画像化することができます。

新しいMRI対応振動装置の開発

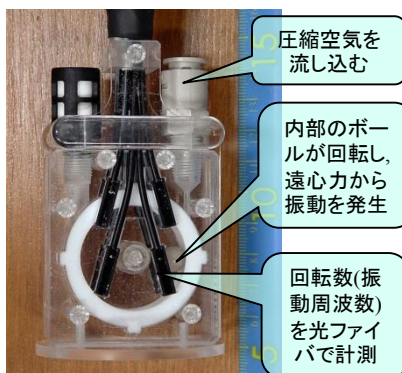
Magnetic Resonance Elastography using an air ball-actuator.
Magn. Reson. Imaging 2013 31:939-46
特許 第5376593号

現行の音圧式加振動装置



- ・低い振動周波数での加振に限定される。(MREの画像分解能が低くなる)
- ・スピーカと振動padを繋げるチューブの長さが数メートルに及ぶ。(振動エネルギーのロスが多い)

新しい加振動装置



音圧式加振動装置と比べて、

- ・高い振動周波数での加振が可能 (MREの画像分解能が高くなる)。
- ・振動発生源が直接的に対象を加振できる (振動エネルギーのロスが少ない)。
- ・振動発生源を小型化できる(体内からの加振も技術的には可能)。
- ・装置が小型でも、振動は強力。
- ・音圧式と同様に、非磁性体部品で構成されているので、MRIに影響を及ぼさない。

有利な点

本研究室では、実現性が比較的高いMRE技術と共に、次世代のMRE技術を担う機器の開発も同時並行で進めています。



TOKYO METROPOLITAN UNIVERSITY

東京都立大学

放射線診断物理学分野

担当教員： 畑 純一

研究内容

医科学イメージングサイエンスを軸とし、積極的に異分野融合研究を取り入れることで診療画像のコントラストメカニズムの解明、生命科学現象との関連性の理解を目指している。また、生命システムの複雑な動態を「目で見て理解する」ための様々なイメージング・計測・解析技術の開発を目指していきます。

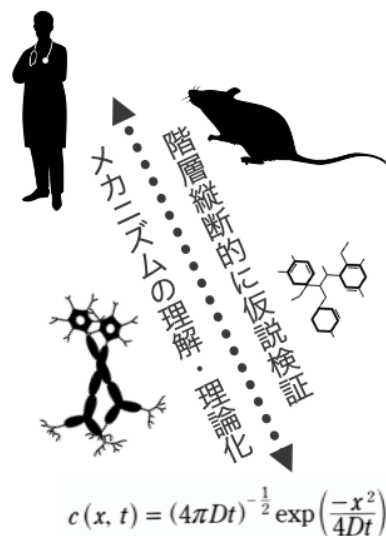
主な研究課題

- ・ アクアポリンの動体可視化法開発とその生体機能における役割解明を目指した基礎的研究
- ・ 脳神経構造・活動による神経コネクトーム技術の開発と全脳ネットワーク理解に関する研究
- ・ 磁気共鳴医学によるパーキンソン病/アルツハイマー病の超早期診断法開発に関する研究
- ・ 次世代型水分子拡散計測技術を用いた脳領域識別技術の開発と領域特定に関する研究
- ・ 麻酔機序の違いによる脳活動領域の特異性理解と意識在処の解明に関する研究
- ・ 遺伝学的レポーターによる単細胞イメージング技術開発と生体内細胞追跡応用に関する研究
- ・ iPS細胞移植による脊髄損傷過程評価画像法の開発と評価基準構築に向けた基礎臨床研究
- ・ 骨格筋細胞種識別を可能とする革新的イメージング手法の開発とスポーツ医学への応用

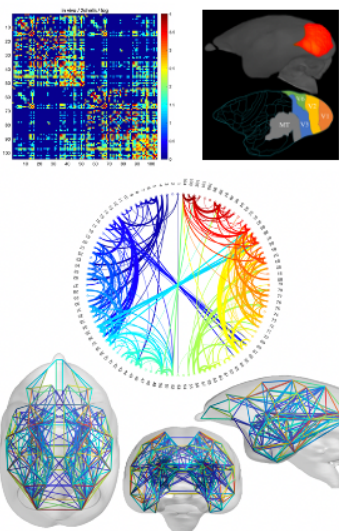
主な共同研究機関

東京大学、大阪大学、名古屋大学、京都大学、慶應義塾大学、東京慈恵会医科大学、国立精神神経研究センター、理化学研究所、放射線医学総合研究所、実験動物中央研究所、霊長類研究所、ジョンホプキンス大学(アメリカ)、コールドスプリングハーバー研究所(アメリカ)、ピッツバーグ大学(アメリカ)、など…

研究コンセプト



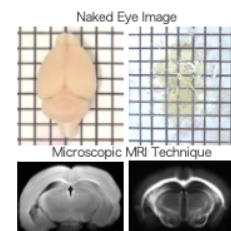
脳活動/構造Networkの理解



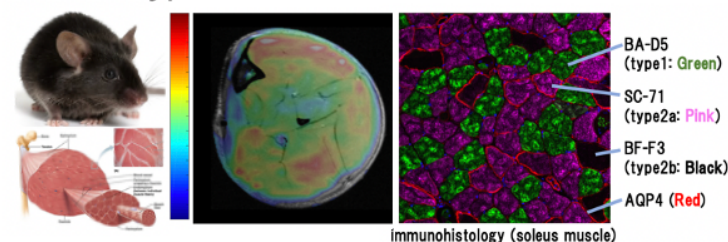
細胞再生過程の評価技術開発



透明脳技術開発



骨格筋Type I, II 細胞の非侵襲的な識別技術開発



専門分野を超えた広い視野を持ち、高い協調性を示してリーダーシップを発揮できる技術者・研究者の教育を目指しています。自分自身の新しいテーマを開拓する能力を育むことも推奨しています。専門分野外の研究者との交流も積極的に行い、理論の基礎を追究しつつ、医科学研究を楽しめる力の育成を念頭に置いた研究展開を行っています。一緒に科学を楽しみましょう。研究室に関して、随時、ご質問・ご相談受け付けております。